

目次

新春特集「縁起物をめぐって」	1	えど友サークルだより	7
新年祝辞(竹内館長/岩松会長)	3	まんが『源内さんの江戸博さんぽ その8』	7
友の会セミナー『シーボルトとモースの日本コレクション』	4	えど友プラザ 甲州道中「ある記」第2回	8
特別観覧会『生誕 120年 川端龍子』展	5	同 一ノ橋通りを下る/初荷のこと	9
江戸博クリップ『企画展の資料借用』	5	江戸博界限⑦『深川七福神とレストラン・さくら』	10
見学会『<大相撲の史跡探訪 その3>本所コース』	6	催事案内	11
「会議・会合日誌」	6	会員優待のお知らせ	12



[新春特集] 縁起物をめぐって

正月飾り、羽子板、七福神など



あけましておめでとうございます。
みなさんご存知のように今年のお正月江戸東京博物館は2日から開館します。お正月を楽しむ展示やイベントがいっぱいです。第2企画展示室では「富嶽三十六景展」とならんで「福をよぶお正月展」が開催されますが、その企画を担当された同館学芸員の松井かおるさんに縁起物についてお話を伺いました。

出席者 松井かおる(江戸博学芸員)
聞き手 清水昌紘(事業部会)
岡田守弘(広報部会)
岡東和子(総務部会)
司会 松原良(広報部会)



松井かおるさん

縁起物とは？

—縁起物というといろいろあると思いますがどんなものがあったところからきたのでしょうか。

松井 お正月の縁起物としては、注連縄や門松、鏡餅飾り、羽子板、熊手などがあります。その他、福をよぶものとして人々から親しまれているもの

として、七福神、招き猫、だるま、福助、お多福などがあります

お正月は年の初めに天からそれぞれの家へ来る歳神様(一年の福德をつかさどる神)を迎えて五穀豊穡を祝う行事で、門松は歳神様の依代として立てるといわれています。注連縄などの玄関飾りは結界で、これより内側には神がいる印とされています。関東地方では三本の竹を松で囲い、裾回りに松の木を削って並べてむしろを巻いて荒縄で束ねたものを用いるのが一般的ですが、地方によって形はさまざまです。鏡餅は三種の神器のひとつ、鏡をあらわし、これに歳神様が宿るともいわれます。また、橙が勾玉を、干し柿が剣を表すと言われていいます。室町時代以

会員資格継続 手続きの お願い

会員資格の有効期限は、入会の日から1年間となっています。間もなく有効期限を迎える方には「継続手続きのお願い」を郵送いたしますので、継続ご希望の場合は同封の払込用紙にて年会費の納入をお願いいたします。友の会は会員の皆さまによって支えられていますので、1人でも多くの方の継続をお待ちしています。

■継続手続きをされませんと、友の会活動への参加や会員特典を受けられなくなりますので、ご注意ください。

降、書院造りの床の間に、鏡餅が飾られるようになったようです。鏡餅の飾りには、このほかにも昆布、伊勢海老、紅白の御幣、水引やゆずり葉、裏白など、縁起の良い物を満載して飾ります。

「助六」の衣装も縁起物？

松井 ところでみなさんは江戸博の「助六の舞台」に立っている揚巻の打ち掛けが黒から赤に変わったことをお気づきでしたか？ 実際の歌舞伎の舞台では、揚巻は黒と赤の2枚の打ち掛けを重ねて着ています。人形に2枚いっぺんに着せるのは大変なので、開館時から昨年までは黒の打ち掛けを着



岡田守弘さん

ていましたが、昨春、赤の打ち掛けに替えました。黒の打ち掛けの背面には羽子板や松飾りなどめでたいモチーフが縫いつけられており、さらに、鏡餅飾りを立体的に作ったものを背中にひもで結びつけて背負っています。——つまり助六の衣装は季節によって変えていくようになっていて、お正月の衣装は縁起物満載といったところなのですね。そんな凝ったものとは知りませんでした。

松井 現在、着ている赤の打ち掛けも背面に仏像の光背のような刺しゅうが金糸で施されていて非常に見事です。普段は後ろ姿をお見せできないので、気が付かれないと思います。

——すると常設展では見ることはできないのですか。

松井 ふだんは見られませんが、1月9日（月・祝）にきていただければご覧になれますよ。「歌舞伎の衣装 スペシャル・トーク」というイベントを15時から、常設展示室5階「助六の

舞台」で行います。

このときに、ふだん展示していない黒の打ち掛けを衣桁にかけてその背面を中心に、江戸博歌舞伎の公演で衣装方を務めておられる森さんに展示・解説していただきます。助六の衣装の解説もあります。

また、トーク終了後、聞いていただいたお客さまには舞台上がっていたので、さわることはできませんが、間近で衣装をご覧いただけます。赤の打ち掛けの背面の刺しゅうもご覧いただけますよ。

——それは楽しみですね。ぜひみなさんもご覧になるとよいと思います。ところでその衣装はかなり重いのでしょうか。

松井 そうですね。実際の歌舞伎では展示してある人形よりたくさんのかんざしをさした重いかつらを使うそうで、かつら、衣装、前帯で何とかバランスをとりながら、三枚歯の高い下駄で八の字（八文字）を踏んで花魁道中を務めるのは歌舞伎役者でも相当な重労働だそうです。

豪華な左義長羽子板

——昔は羽子板は実用の遊び道具という面もあり、飾り用の羽子板とは別物でしたが、今はもう飾り用だけで縁起物ですね。

松井 そうです。今度の「福をよぶお正月展」では正月飾りや婚礼調度に使われる「左義長羽子板」を展示します。宮中の左義長が描かれていて、金銀ばくなどで花や鳥、福の神などが描かれているものです。江戸期にさかんに作られました。上流階級の人たちの間ではやったようです。紋が入っているので大名家などで使ったのでしょうか。明治になってからも多少は作られました。

——その「左義長」というのは何でしょうか。

松井 古くは三鞠打、三毬杖などと書いたのです。宮中で正月の15日と

18日に毬杖（毬を打つスティック）を3本立ててはやしながらかいた行事のことです。民間では正月行事で用いた門松や注連縄、熊手や書き初めなどを集めて焼く行事を左義長、またはどんど焼きと言いました。ただし、ただでさえ火災が多かった江戸では、たびたび左義長の禁止令が出て、こうした習慣は幕末から明治大正には廃れていたようです。

——その左義長の絵が描かれた羽子板が出展されるのですね。

松井 そうです。そういえば羽子板ですが、以前は小学校の工作の時間に作ったそうですね。板にサザエさんや少女などが描かれた手作りの羽子板が、時折り江戸博に寄贈されます。昔はお正月にこうした羽子板で羽根をつけて遊んだのでしょうか。

——左義長羽子板は遊び道具としては使えないものですね。

松井 もちろんです。非常に豪華なお正月に飾ったり、婚礼調度品などに使われました。

——きつとすばらしい羽子板でしょうね。早く見たいものです。

ホール前の熊手に注目

——熊手も縁起物ですね。江戸博では1階ホールの前にとても大きな熊手が1年中飾られています。

松井 ホールの前に飾ってある大きな熊手はみなさんよくご存知のものです。あれは、映像ライブラリーの番組として熊手作りを収録させていただいたのが縁で、職人さんがご厚意でくださったものです。

——江戸博が購入したのではないので



岡東和子さん

新年祝辞

江戸東京博物館 館長 竹内 誠

友の会会員の皆さま、新年おめでとうございます。平素より多大なご支援に厚く御礼申し上げます。博物館を取り巻く環境は、さらに厳しくなっておりますが、友の会をはじめとする皆さまのご支援に支えられ、より親しまれ、愛される博物館をめざして、本年も職員一同いっそうの努力を重ねてまいります。昨年、友の会の事務室が一新し、より至便な部屋にお移りいただきました。ここを拠点として、「えど友」発行や、セミナー開催など友の会活動のさらなる進展を大いに期待しております。本年が、友の会会員の皆さまにとって良い年でありますとともに、友の会がますます発展する年となりますよう、心よりお祈り申し上げます

新年祝辞

江戸東京博物館友の会 会長 岩松 精

新年おめでとうございます。江戸博友の会も発足してから、本年で5年目になります。この間、会員は1,000人と大きく発展してまいりました。これは館長をはじめとする江戸東京博物館のご協力のたまものであり、特に昨年は新たに事務室をご提供いただくなどそのご支援には深く感謝しております。また、会の役員、部会員の方々の日頃の努力と、会員の皆様のご協力にも感謝しております。本年も、今まで以上に新鮮な企画を立て、会員の皆様にご満足いただけるよう努力して行く所存ですが、皆様の積極的なご意見やご提案をぜひお寄せ下さいますよう、お願いいたします。最後になりましたが、会員の皆様の益々のご多幸とご健勝をお祈り申し上げます。

すか。

松井 いただいたものです。その上、年に3、4回、定期的に飾り物を替えてくださっています。季節によってかわっているのに気が付かれましたか。——いいえ。そんなこと全然知りませんでした。そこまで見ている人は少ないと思います。

松井 そうですね。よく見ていただくとお正月には鏡餅やその他いろいろ。夏にはスイカやかき氷などが飾られていたりするのですよ。もちろん作り物ですが。

——これは楽しみが増えましたね。今度注意してよく見たいと思います。ところで、熊手はいつ頃から縁起物になったのでしょうか。

松井 鳳神社で行われていた熊手などの農具を売る市が、18世紀の中頃から福德をかき集めるとして信仰上の意味を持つようになり、七福神や宝船、お多福や升など縁起物を飾った熊手を売る酉の市が盛んになったようです。

江戸に伝わってきた七福神めぐり

——私たちもよく七福神めぐりをやりますが、この社寺をめぐるというのと七福神そのものとはどちらが先だったのでしょうか。

松井 もとから日本にあった恵比須神

や中国経由でインドから入ってきた大黒神などの信仰が、仁王般若経の「七難即滅、七福即生」という文言から中国の神などを追加して七神になったという説、禅や茶道の隆盛によって中国から伝わってきた「竹林の七賢人」から七神になったという説などがありますが、いずれにしても七福神信仰は室町時代に京都の町衆のあいだでさかんになったようです。七福神巡りは江戸期に京都で、観音霊場巡拝をまねて始まり、寛政期、江戸に伝わって、当時流行しつつあった観光と神仏巡りを兼ねた行楽のひとつとして注目されたといわれています。こうした行楽の延長線上に大山詣で、伊勢参りなどもあったのでしょう。七福神巡りは幕末には周辺各地の寺社にひろがって隆盛をきわめ、松の内に巡拝するという現在のスタイルが確立したようです。

——七福神といえば、宝船の絵を売り歩く「お宝売り」というのがいたそうですね。

松井 七福神を乗せた宝船の刷り物は、正月2日の夜にこれを枕の下に入れて寝ると「一富士、二鷹、三なすび」の吉夢がみられるなど、運が開けるといって縁起物で、これを町中で売り歩く「お宝売り」の売り声が、江戸・東京の新春を告げる風物詩であったと



清水昌敏さん

いわれます。お宝売りは明治期ごろまでで廃れたようですが、都内のいくつかの神社では、正月には、現在でも宝船の絵を入手できるようです。当館でも、昨年に続いて、「えどはく正月寄席」のなかで、江戸売り声の名手、宮田章司さんの「お宝、お宝」という売り声とともに、宝船の絵を無料でお配りします。2日だけでなく、正月の催しの期間中（9日まで）毎日、先着千名さまにお配りします。縁起物ですから、ぜひ、この機会に「江戸博の宝船絵」を手に入れてください。このもととなるものや他の宝船絵もこの企画展で展示いたします。

——1月2日（月）から同22日（日）までの「福をよぶお正月展」が楽しみになってきました。本日はお忙しいところありがとうございました。

【記録】 文：広報部会・岡橋園子
写真：同・岡田守弘

多種類、膨大な数のコレクション

シーボルトは文政6年(1823)と幕末の安政6年(1859)、都合2回来日しています。第一回目は、鎖国下の日本の窓口であった長崎「出島」に医師として駐在するというかたちでの滞日でしたが、その真の目的は知られざる国、日本のことを徹底的に調べるといふ使命を帯びていました。シーボルトはオランダ政府から日本の総合的研究を委嘱されて日本にやってきたのです。それによって当時の日本は、西洋における最新の科学技術や学問を吸収することができました。

シーボルトのコレクションは多地域に散在していますが、第一回日の来日時のコレクションは、ライデンの国立民族学博物館に十数万点あります。たとえば刺身包丁やおろし金、重箱、しゃれた意匠の施された鯛や鶴の蓋物、酒器など、日本人の生活が体系的に理解できる資料が収められています。また収蔵庫には、食べ物も保管されています。しみ餅や海苔、寒天のほか、和紙や漆で作られたイミテーションの躰節もあり、当時の日本人の技術力がうかがえます。そして動物は、ライデンの自然史博物館に剥製が収められており、また、植物に関しては、腊葉館に日本の植物標本が約1万2千点ほど保管されています。シーボルトはそれらの植物をライデンに根付かせる、今日、現地で見られる柿、あじさいなどはその例です。

絵師・川原慶賀によるビジュアル化

シーボルトは物を集めると同時に、日本人とはどのような民族なのか、カメラのなかった当時、日本の風景や人びとの姿かたち、産業や芸術、生活民俗の様子を川原慶賀という絵師を雇って記録させ、彼の絵をビジュアル資料として本国に持ち帰りました。

慶賀はもともと長崎の町絵師でしたが、シーボルト来日以前よりオランダ

第34回 江戸東京博物館友の会セミナー(2005/11/26)
シーボルトとモースの
日本コレクション
—19世紀における日欧米異文化交流(その1)—
講師 小林淳一さん
(江戸東京博物館 事業企画課長・学芸員)



商館長プロムホフに仕えていました。慶賀は写真のように正確に対象を描写できる絵師でしたが、面白い絵師でもありません。プロムホフの家族団欒の様子を描き、その人物をそのままモデルに使った春画を残しています。後に有名なシーボルト事件にも連座することとなる川原慶賀は、美術史家からあまり注目されなかった異色の画家ですが、シーボルトを通じてヨーロッパに渡った彼の絵がもたらした影響は計り知れないものがあります。

蘭学塾と江戸参府

シーボルトは出島の住居とは別に「鳴滝塾」という私塾を開設します。ここには全国から蘭学を志す人びとが集い、西洋の科学技術を学びました。シーボルトの出島における生活は非常に制約があったので、弟子たちに論文の課題としていろいろなものを収集させる手法をとりました。

文政9年(1826)、シーボルトは江戸参府を行います。この旅には慶賀も同行させ、軍事上の機密保持の観点からも大変に重要だった関門海峡の絵などを描かせました。江戸滞在中は蘭学の知識と引き換えに、幕府の重要人物

と交流を図りました。そして、日本橋の長崎屋を舞台に入手した国禁の地図をオランダに持ち帰ろうとしたことが発覚し、天文方の高橋景保など50数名が処分された「シーボルト事件」が起こります。

しかし、このような経緯のもとに、今日に残るシーボルトの膨大なコレクションが形成されました。この旅で慶賀が描き溜めた「人物画帳」は現在、ミュンヘンの博物館に保存されており、109人の日本人が描かれています。武士はひとりもなく僧侶や職人、芸人といった庶民の姿が収められており、シーボルトが第一回日の来日を終えて著わした『日本』の中で挿絵として使われています。

帰国後のシーボルトと息子たち

シーボルト第二回目の来日は開国の時代で、やはり政治的な使命を帯びてやってきました。帰国後、シーボルトは自分自身の企画でミュンヘンに日本博物館をつくらうと思立ちます。そのためのコレクションは、漆製品、煙草入れ、根付といった見栄えのする工芸品が多く見られます。しかし、志半ばでシーボルトはミュンヘンの地で亡くなり、没後、妻が売ったそれらのコレクションは今日、ロシアの博物館をはじめ、各地に散在しています。

彼の息子アレクサンダーとハインリッヒとの兄弟は父親同様、その後、日本に大いに関係してゆくのですが、第二回目の来日時には長男のアレクサンダーもともに日本の地へ赴きました。シーボルトは帰国しますが、アレクサンダーは日本に残り、「不平等条約」の交渉や通訳など、さまざまな形で日本の外交に貢献しています。次男のハインリッヒは、父親に勝るとも劣らないあまたのコレクションを残し、それらは現在ウィーンの国立工芸美術館と民族学博物館に保存されています。

【記録】 文・写真:広報部会・斉藤美香子

企画展 「生誕120年 川端龍子」展



東京下町育ちの文化勲章受賞画家として、人気の高い川端龍子の生誕120年を記念する展覧会が開催され、その特別観覧会が10月31日おこなわれました。龍子といえば、浅草寺本堂の天井画、目黒不動尊本堂の天井画、池上木門寺祖師堂天井画など、雄渾壮大な画風で日ごろからおなじみです。

川端龍子(本名昇太郎)は10歳の時、和歌山から家族とともに上京、日本橋筋京町で育ちました。その後、徳富蘇峰が主宰する国民新聞社に入社、挿絵画家・漫画家として活躍しました。明

治後期には少年少女向け雑誌で絵筆をふるい、特に双六作家として大評判となりました。その多才ぶりは絵だけでなく、ジャーナリストとして記事やルポにも、多能ぶりを発揮しました。俳句雑誌「ホトトギス」の表紙を、長期間にわたり描きつづけています。

今回の展覧会では彼の少年期から晩年まで、また代表作から小品スケッチまで130点ほどが展示され、「この天才画家の集大成ともいえるべき大観覧会」(毎日新聞社中島常務取締役)となっています。まさに不世出の画家の美の世界と、その足跡をたどることができます。

作品内容は「在野の巨人」と評された龍子の面目躍如、とりわけ大作の大胆奇抜な構図の見事さ、色彩の玄妙さは目を引きまします。大正時代当時の日本画の主流は繊細さとか精密さなどで、画題表現することでした。これに対し龍子は、展覧会で観衆に訴える「会場芸術主義」を主張しました。日本画の伝統技法にとらわれない、ゆたかで自由な発想のもとに、洋画技法も駆使して力強く表現しています。

月明かりに飛翔するカモの群れを上空から見た「南飛図」、戦闘機を透視し描いた「香炉峰」、斬新でフォトジェニックとも言うべき「新樹の曲」など、意表をつくものが数多く出展されており、偉才の神髄に触れることができます。「源義経(ジンギスカン)」という機知に富んだものや、空襲直後の庭の印象を描いた「爆弾散華」など、いずれも熟練した筆遣いと、非凡で流暢な筆の流れにあふれており、その力量に感嘆させられます。

晩年の「草描西国三十三カ所巡礼」は精妙なデッサンと静穏な文章により、大作とは一味ちがう豊かな情感を感じさせます。

ちょっと面白いものでは、あの大鵬が初優勝したときに着けていた、龍子デザインによる化粧回しも展示されています。

会場では全体を包みこむ「会場芸術」の魅力が遺憾なく実感できます。さらに81歳の生涯を精力的に活動した東京育ちの画才川端龍子の、才気と鼻っばしらをひしひしと感じました。

【取材】文・写真：広報部会・稲垣武志



江戸博クリップ

企画展の資料借用

学芸員 江里口友子

平成17年度第1回企画展「シルクロード展」の資料借用のため、昨年3月末、中国陝西省西安市に行った。陝西省からの借用数は25件であるが、国外に出すのは初めての国宝壁画4点が含まれており、資料の状態点検と運搬には細心の注意が必要でその責任は重い。

借用資料は、中国側の貸出担当者といっしょに1点ずつ、詳細に傷や剥落、ヨゴレ、脆弱な箇所などを確認し合い、同じ内容を点検用紙に記録し、点検終了の証に双方の記名を行う。点検・梱包・税関検査・搬出には最低4日は要す。1971年に出土した「狩猟出行図」

「宮女図」は、傷みや剥落が多く、修復箇所もあるので点検だけでそれぞれ1時間以上かかってしまった。

これらの壁画は出土後に墓から剥ぎ取り、木製の額に納めて陝西省歴史博物館の地下収蔵庫に保管されているのだが、今から30年以上前の保存処理のため、状態が不安である。運搬は、日通関東美術品支店が総力を結集し、技術の高さを示してくれた。内箱に壁画を入れ、それをスチール製の長方体の枠に麻縄で中空に吊り、床置きした場合に生じる底部の震動を防ぐのである。スチール枠をさらに外箱に納めて完了。その場にいた中国の美術品輸送

業者、博物館職員、文物局幹部一同感嘆の声をあげた。外箱に大きな衝撃を受けると色が変化して衝撃を知らせる特殊シールを貼ってトラックに積み、西安空港まで40kmの速度で運転。空港でJALの輸送担当者に引渡し、空輸専用梱包を見届け中国内の輸送確認が終了する。

企画展準備をする度に、多くの人々が協力し、それぞれの専門性を発揮することで完成することを実感し、人間の力は素晴らしいと思うのである。

◆このコラムは江戸東京博物館の学芸員や講師など館職員の方に執筆をお願いしています。

高砂顕彰碑を特別に見学

＜大相撲の史跡探訪 その3＞ 本所コース



▲小雨の中、参加のみなさん

「大相撲の史跡探訪」シリーズの3回目は本所コース。JR 総武線・亀戸駅を出発点として、江戸から明治にかけて活躍した横綱の史跡や墓を巡るコースですが、この付近の史跡見学も盛り込んだ企画です。まず駅前で亀戸の地名の由来などの説明があり、早くも史跡巡りの雰囲気になりました。

最初のポイントは江東区では最古の神社といわれる香取神社です。創建は天智天皇4年(665)といわれているとので、その古さがわかります。

次いで、江戸時代初期に伊勢屋彦右衛門が梅林をつくったことに由来するという「亀戸梅林敷跡」の標識の前を通り、普門院へと向かいました。ここには第9代横綱・秀ノ山雷五郎の墓があります。秀ノ山は本名を橋本辰五郎といい、横綱昇進は弘化2年(1845)、嘉永3年(1850)の引退までの生涯成績は112勝21敗33分2預り、優勝

6回で、身長164cmの小兵、大変な努力家だったと伝えられています。

伊藤左千夫の墓などもあるこの普門院を後にしてしばらく行くと、ほどなく亀戸天神の東門に出ます。亀戸天神はみなさんよくご存知のところですが、この日は社殿の裏庭にある「高砂顕彰碑」を特別に見せていただきました。

この高砂は明治10～20年代(1877～1887)の高砂親方で、その実績と統率力から相撲中興の祖といわれています。この「高砂顕彰碑」は病魔に冒され再起不能となっていた明治32年(1899)6月に、当時の横綱小錦八十吉以下の門下生によって建立されたものだそうです。

神職の案内で社殿横のくぐり戸を抜け裏庭に入ると隅にその顕彰碑がひっそりとありましたが、これはその断片だそうです。建立当時は幅2.45m、高さ5.45mもあった大きなもので、

関東大震災と東京大空襲でくずれ落ちた後、戦後隣接家屋の改築時に廃棄石材の中から宮司が偶然「高砂」の文字を見つけ拾い出した、という話まで聞きました。

「マッチの碑」など珍しい碑がたくさんある亀戸天神のあとは本誌前号10ページでもご紹介した報恩寺です。ここには第16代横綱・西ノ海嘉次郎の墓があります。西ノ海は本名を小園嘉次郎といい、横綱昇進は明治23年(1890)、同29年(1896)引退までの生涯成績は127勝37敗25分4預り、優勝2回で、番付に横綱と書かれた最初の力士だそうです。

朝から小雨がぱらつく空模様でしたが無事終了。参加者は22名でした。

【報告】 文：広報部会・松原良
写真：岡田守弘

◆役員会

10月13日(木) 18時から開催。会計から4～9月の収支はほぼ順調に推移していることが報告された。「友の会事務室使用規則」案が了承されたほか、友の会設立5周年記念行事開催の提案、新規加入・更新会員へのあいさつ文見直しの提案があり、次回までに具体案をまとめることとした。出席12名。

11月10日(木) 18時から開催。5周年記念行事として来年3月23日(木)に竹内館長記念講演と懇親会を行うことで調整が済んだ旨会長より報告があり、了承された。名刺の作成については慎重論もあったが、外部交渉・取材などで特に必要

会議・会合日誌

2005/10～2005/11

な者に限り認めることとした。出席12名。

◆事業部会

10月6日(木) 18時から開催。9月事業の報告、10～1月までの担当者決定のほか、古文書講座等の日程について博物館側との調整の結果が報告された。出席18名。

11月2日(水) 18時から開催。10月事業の報告などのほか、来年度のセミナーの方針について協議した。出席16名。

◆広報部会

10月12日(水) 16時から開催。役員会への提案事項、『えど友』第

28号の校正分担、同29号「新春特集」の内容などを話し合った。出席8名。

11月16日(水) 15時から開催。『えど友』第29号の日程、内容、担当の確認などを行った。出席7名。

◆総務部会

10月6日(木) 14時から開催。『江戸東京博物館 NEWS』などの発送作業を行った。出席6名。

10月27日(木) 14時から開催。『えど友』第28号などの発送作業を行ったあと、今後の部会月例化などを取り決めた。出席9名。

11月24日(木) 14時から開催。5周年記念行事が決まったことなどについて話し合った。出席6名。

会員の自主的サークル・「えど友サークル」の最近の活動状況をご紹介します。

◆江戸三十六見附を巡る会

◇10月16日(日)に第7回を開催。東京駅丸の内北口に集合、断続的に小雨が降る中、和田倉門一西の丸大手門(二重橋)一坂下門一大手門一松の廊下跡一天守閣跡一二の丸跡庭園一平河門のコースを巡った。これで三十六見附を巡り終わったが、何らかの形でサークルを存続させようという声もあり別途打合せが持たれる予定。参加者は14名。

◆落語・講談を楽しむ会

◇10月14日(金)に第12回会合を開催。今回は活動1年になるので、この1年間を総括し、向う1年間の運営方針を話し合った。その結果、引き続き鈴木秀明さんに世話をお願いし、特に規約などは設けず月1回のペースで活動していくことになった。参加者は10名。

◇11月22日(木)に第13回会合を友の会事務室で開催。今回はビデオ鑑賞で、第5回で紹介した落語「景清」を関東芸(8代目桂文楽)と関西芸(3代目桂小文枝=桂三枝、文珍の師匠)で聞き比べた。また音声のみで落語「崇徳院」を関東(3代目桂三木助)と関西(2代目桂枝雀)で聞き比べた。参加者は7名。

◇18年3月15日(水)にサークルメンバー以外の会員にも呼びかけて「愛宕山(梅見)とその周辺散策&講談鑑賞」(参加費3000円)を行う予定。およその予定は地下鉄日比谷線神谷町駅に9時40分集合、専光寺(講談「白子屋政談」のお熊の墓)から愛宕神社で「曲垣平九郎手折りの梅枝」を見ながら、講談師の神田織音さんのガイドで「寛永三馬術」のあらすじを説明していただき、浅野内匠頭終焉の地、烏森神社を経て新橋駅へ、JRで両国へ行き、昼食後お江戸両国亭で講談「寛永三馬術」の連続読み(4席)を鑑賞する。参加費にはガイド料、寄席入場料、両国への交通費、昼食代が含まれる。詳細は次号でご案内します。興味のある方は事務局まで問合せを。

◆藩史研究会

◇10月26日(水)第4回の会を開催。第1～3回の勉強発表会を終わるにあたり高輪・東禅寺墓域を訪問し、伊予宇和島藩伊達家、信濃高島藩諏訪家、豊後白杵藩稲葉家などの墓所を参詣した。その際、伊予宇和島藩伊達家第12代当主伊達宗禮氏にご案内いただき種々お話

源内さんの江戸博さんぽ 其の8



を伺った。参加者は14名。

◇11月30日(水)第5回の会を開催した。今回は細川幸幸さんが日向飢肥藩・伊東家について、その立地、地名の由来から古代、中世までの歴史の変遷、中世以降の伊東氏と鳥津氏の抗争を経て飢肥藩・伊東家成立までの経緯、そして関が原の合戦から明治の廃藩置県までの研究発表を行った。参加者は11名。

◆古文書で『八丈実記』を読む会

◇10月13日(木)に第2回の会を友の会事務室で行った。今回は、寛文13年(1673)から読み始め天和2年(1682)まで。島に出入りした船や人の数、積荷と島の産物との交換の様子、津波のことが詳しく書かれている。八丈町の地図を見ながらの楽しい会となった。参加者は11名。

◇11月10日(木)に第3回の会を友の会事務室で行った。今回は天和4年(1684)から元禄3年(1690)までで、「流人には坊主が多く、これは女性に対する戒律を破ったもの」など興味深い記述もあった。参加者は7名。

●新しいサークルの立ち上げを!

現在4つのサークルが独自の活動を展開しています。みなさんもサークルを立ち上げて、同じ趣味や関心を持つ人々との交流を深めてみませんか。サークルをスタートさせるための資料(ガイドライン)の請求、お問い合わせは事務局へ。

申込先 〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1
江戸東京博物館友の会事務局
Tel.03-3626-9910

えど友プロジェクト

～友の会会員の投稿欄～

甲州道中「ある記」 第2回 内藤新宿～調布 管林義隆

新宿駅南口、ヴィクトリアスポーツの角あたりに高札場があったようだ。内藤新宿ともお別れして西へ向かう。玉川上水の北側が角筈村、南側が千駄ヶ谷村であった。このあたりは武蔵野地方から多大の物資が集まり、江戸への中継地として繁盛した。角筈村にあった多門院の跡を確認できるものはなかった。

左側に威容を誇る建物は文化服装学院、いやいや文化女子大学、文化女子短期大学まである。このあたりの変わりようもすごい。さすが新宿副都心だね。

代々木村と角筈村の境の左側に「天神社」が今も残されている。境内には樹齢約400年といわれる常緑銀杏がそびえていた。重ね地図を見ながら歩くのは実に楽しい。

諦聴寺、正春寺を過ぎると頭の上が高速道路でふさがれてしまった。これからしばらくはコンクリートの下を歩くことになるのを覚悟した。右にオペラシティビル、新国立劇場を見ながら直進。幡ヶ谷一丁目歩道橋の左、コンクリートの建物の一部に「子育て地藏尊」が祭ってあった。さらに排気ガスを気にしながら歩いていくと、中野通り(旧鎌倉街道)との交差点の左手前にも地藏尊があった。「牛窪地藏」と言い1710年の建立。また同じ敷地に「道供養塔」なるものがあり、“この碑によって、江戸時代の道供養信仰を知ることが出来る。橋供養と同じように、道路自体を供養して報恩感謝の念を捧げることによって、交通安全を祈ろうとする全国でも珍しい供養碑で

す。”とのこと。古くは鎌倉街道の供養碑でもあったのだ。

高速道路の高架下をひたすら西へ進んで大原交差点(環七通)を過ぎたところで、左に玉川上水の開渠部が現れ、上水をまたぐように京王線「代田橋駅」のホームが見える。休憩するにはもってこいの場所。井の頭通りと交わる松原の交差点、明大和泉校舎を過ぎると和田堀廟所に続き、真教寺、栖岸院などのお寺が次々と現れた。それぞれにいわれがあるのだ。ちょっと外れたので、道を元に戻して進むといよいよ高井戸宿だ。とは言っても、月の前半を「下」が受け持ち、後半を「上」が受け持つ合宿になっていた。下高井戸一丁目「桜上水駅」入口手前に「アブラメン」なるものを食わせるお店を見つけ食べてみた。油でいためたうどんのような感じだったが、まあまあ食べ応えだった。

右手に「覚蔵寺」、「宗源寺」があったが、このあたりに本陣があったらしい。高速道路とお別れする寸前、またまた「鎌倉街道入口」なる交差点を通過した。やっと排気ガスから開放され、環八通との交差点「高井戸陸橋」を過ぎて左側の旧道に入った。「芦花公園駅」入口の少し手前に「長泉寺」があり、墓地にはかつて上高井戸宿の本陣であった「武蔵屋」(並木氏)の墓があるそうだが見られなかった。なお境内では4月に「馬駆」、8月に「相撲」が行われ、近村にも有名であったと解説板に書いてあった。

烏山に入るとビルも少なく、昔の雰囲気になんとなく漂い、下宿や中宿と言ったバス停などもあり、「道中歩き」の気分で足取りも軽くなった。左に烏山住宅、北給田住宅を過ぎ、仙川を渡ると国道20号(甲州街道)に合流し、車の量が格段に増えた。「仙川駅」人口交差点のコンビニの角に「仙川一里塚跡」の碑があった。日本橋から5里(約19.6km)の距離にあり、三鷹街道との交差点、手前の一里塚は上北沢、

次が小島一里塚となっていた。

左側キュービー仙川工場の先、右側に黒光りしたかやぶき屋根風の大きな家屋が目に入り、何か由緒のある家ではないかと近づいて行くと、真新しい石柱が立っていた。右に馬宿「川口屋」とあり、左の細い道を「瀧坂旧道」と表示されていた。狭い道幅の道を300mほど下って行くと瀧坂下で国道と合流した。

ケヤキ並木の国道をしばらく進むと西つつじヶ丘二丁目に「金子のイチョウ」というのがあった。一対のイチョウで、幹囲いは雄木4.01m、雌木1.97m、樹齢約250年と推定され、鹿島平兵衛という人が金子村の名をこの巨木に託したそうだ。国道に目をやると、日本橋より21kmの標識が目に入った。また、右手奥100mぐらい先の所に鮮やかな朱塗りの門を見つけ、お寺さんようだったので中に入った。寺の名前は「金龍寺」とあり、その名が記されている伊能忠敬測量・製作「大日本沿海輿地全図」の写しの一部が掲げてあった。

柴崎を通過して調布警察署の先、国領から三度旧道に入り、西へ向かった。国領、下布田、上布田、下石原、上石原の五つの宿で「布田五宿」、「布田駅」入口の右手に「常性寺」と「成田山不動尊」、少し先に徳川歴代将軍の菩提を弔う御朱印寺「蓮慶寺」をのぞいた。

下石原一丁目を過ぎた左側、甲陽鎮撫隊所ゆかりの地である「西光寺」の手前に近藤勇の坐像が没後130年を記念して設置されていた。

【次号に続く】



▲真新しい石柱

一ノ橋通りを下る

藤原平八郎

博物館の学習室を借りて、毎月決った日に集っている「らいらく俳句会」の仲間を誘って江東区常盤一丁目にある「江東区芭蕉記念館」まで歩いてみることにした。

この辺は川も道路もあたかも碁盤の目のように東西南北に走っていてけん味がない。南北に走っている道路は隅田川に近い方から順に番号が付けられている。

三ツ目通りとか、四ツ目通りとかいうのがそれだ。三ツ目通りと四ツ目通りの間隔から推察して清澄通りが二ツ目通りに当るだろうことも見当は付けていたのだが、実はそうではなかった。清澄通りは二ツ目通りではなく一ツ目通りであった。そのことは新人物往来社『江戸切絵図散策』(2002年12月12日発行)で知った。「江東区芭蕉記念館」へ僕たちは偶然のことではあったが一ノ橋通りと称する手頃な道を発見した。京葉道路にそって回向院の門前を両国橋方向に歩いて行くと最初に南へ曲がる道路の角に一ノ橋通りを表示する道標が出ていた。そこを曲がって一ノ橋通りに入る。すぐに豎川を渡る橋のたもとに出る。何とこの東西に走る豎川に架かる最初の橋の名が一ノ橋だった。豎川の水はお世辞にもきれいではなかった。水門は閉ざされていて橋のたもとには船着場があって釣舟が二・三艘舫ってあった。通りの名は橋の名に由来しているらしい。そのまま下る。ほどなく東西に走る新大橋通りと交叉する。交叉点を渡ると「江東区芭蕉記念館」はすぐである。交叉点から百メートルほど離れて池波正太郎が『鬼平犯科帳』や『剣客商売』の取材でこの地に立ち寄ったときにたびたび訪れたという「煉瓦亭」がある。ちょうど昼どきだったのでここでそれぞれ食事をとって休息した。

財団法人江東地域振興会の「江東区

芭蕉記念館」は、三階建てで万年橋通りに面していた。この辺で一ノ橋通りは万年橋通りと名を変える。万年橋通りをまっすぐ南下すると数10mほどで小名木川に架る万年橋に出る。小名木川は江戸時代初期に江戸と千葉を結ぶため東西に掘られた運河であった。小名木川の水門も閉ざされていた。

小名木川に架る万年橋の北詰の地に、芭蕉の門人で幕府出入りの鮮魚商であった杉山杉風の魚のいけすがあった。その場所は確定できないが延宝8年(1680)の暮に芭蕉はその番小屋に越して来たらしい。「古池や蛙飛び込む水の音」という有名な芭蕉の句はこの辺でよまれたらしい。大正6年(1917)の天津波で芭蕉遺愛の石造りの蛙が出土したといわれる万年橋北詰の地には芭蕉稲荷神社が祭られている。

芭蕉はこの地で火災に遭ったりして住む場所を変えているから、簡単に「江東区芭蕉記念館」がある土地に住んでいたのか、芭蕉稲荷神社が祭られている辺に住んでいたのか、つまびらかにすることができない。それはともかくとして、いずれにしても芭蕉はこの辺に住んでいて『野ざらし紀行』や『笈の小文』や『おくのほそ道』の旅にこの地から出発して行った。

「江東区芭蕉記念館」に立ち寄ってしばらく休憩をとり句をひねった。

片蔭を逸れ一ノ橋見つけたり 楽人
煉瓦亭は床も煉瓦や秋暑し 芳夫
菘菜のふた実供へし芭蕉像 潤一
芭蕉がこの地に越して来た延宝8年に隅田川には両国橋はあったが新大橋は無かった。新大橋が架かったのは元禄6年(1693)のことであった。新大橋が架かるまでの間、芭蕉は俳句のメッカだった日本橋界隈まで出るには両国橋を回るか舟を利用するしか手は無かった。大変不便だったのだろう。

僕たちは、京葉道路まで引き返ってきて両国橋を渡って日本橋界隈まで歩いた。一時間以上かかった。どうということもなかった。

初荷のこと

桐井聡男

正月にはいろいろと多くの行事が重なり、それはそれで新しい雰囲気を持って、いかにも年の初めという初々しい感じがするものです。江戸博も2日からのオープンということで職員の方々本当にご苦労さまです。初詣、あるいは七福神詣の往来にぜひ足を運んでいただきたいものです。

ここで正月行事の最も派手なものは品物満載のトラックが初春の街頭を走っている姿かと思えます。かつてはどここの商店でも大晦日は夜遅くまで掛取り・在庫調べに忙殺されて除夜の鐘が鳴るまで働いたそうです。ですから元旦はただ寝正月のようなものになったのかも知れません。その代り1月16日にはやぶ入りといって自由な時間が与えられていたようです。

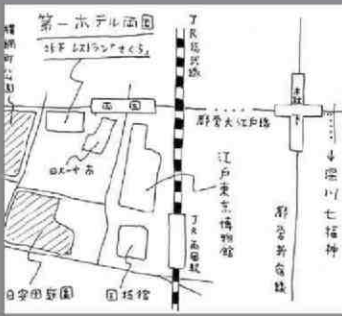
本来、初荷は元旦の方が適切のように考えられますが、江戸時代の人々はしゃれを好んだのか、縁起を尊んだかは別として、元旦を初めの日として初の2日としたのです。それを略して初二となり初荷となったのです。私は江戸時代の人々の機知が現在でも続いていることに驚きます。もちろん誰がどんな商品を一番初めに運んだかは不明ですし、江戸が最初か上方が最初かも分かりません。上方からの商品はクダリモノとして現在でもクダラナイものという言葉があるように、それに対抗して江戸が流行のもともかも知れません。これは各種の商売往来という本からもうかがうことができます。

終わりに歴史メモを。明治5年11月9日、従来の陰暦を廃止し12月3日を以て明治6年1月1日とする旨の布告により新暦が始まりました。いずれにしても明治はいや昭和も遠くなりという気がします。ともかく大河ドラマの特別展や北斎の富嶽三十六景展を見物して、心ゆくかな月日を送りたいものです。

ちょっと寄ってみませんか？

江戸境界隈 ⑦

[深川七福神]と[レストラン・さくら]



深川七福神めぐり

都営地下鉄・大江戸線の「両国駅」から1駅の「森下」を起点に2時間ぐらいで回れます。

1. 寿老神の深川神明宮

森下駅から徒歩5分。神明宮は深川八郎右衛門が深川村を開拓し、鎮守の宮として慶長元年(1596)に創建。寿老神は道教の神で延命長寿の神です。

2. 布袋尊の深川稻荷神社

神明宮から徒歩13分。この神社は無住社で町会の管理、創建は寛永7年(1630)。布袋尊は七福神の中で唯一、実在の人物。中国五代の頃の高僧、契比(歿916)で、中国では弥勒菩薩の化身とされ、清廉、度量を授ける神です。

3. 毘沙門天の龍光院

稲荷神社から徒歩13分。慶長16年(1611)の創建。毘沙門天はヒンズー教の財富の神だが仏教に取り入れられ

て仏神となり、仏教守護から転じてわが国では国土守護の武神として武将の間に信仰が厚く、勇気を与える神です。

4. 大黒天の円珠院

龍光院から徒歩12分。円珠院は享保(1716~35)の創建。大黒天はインド名をマハ(大きな)カーラ(黒い神)といい、密教に取り入れられ糧食を豊かにする神となったヒンズー教のシバ神の分霊という説と、大きな袋を担いだ大国主命とする説とあるが、大黒は大国に通じ、わが国では財宝糧食の神とされています。

5. 福祿寿の心行寺

円珠院から徒歩13分。心行寺は元和2年(1616)の創建。福祿寿は南十字星の化身で、この星を見ると長生きするという伝説があり、中国で生まれた信仰。長命と円満な人格を授ける福の神です。また福(幸福)と禄(財)と寿(長命)を授けるともいいます。

6. 弁財天の冬木弁天堂

心行寺から徒歩7分。豪商、冬木弥平次が宝永2年(1705)、邸内に弁財天を安置。弁財天はもとはヒンズー教の音楽の神で、仏教に取り入れられ才知弁舌の神、弁才天となるが、わが国では財宝を授ける弁財天となりました。

7. 恵比寿神の深川八幡宮

弁天堂から徒歩10分。八幡宮は寛永4年(1627)の創建。境内の西側に

ある^{えびす}恵比寿宮に安置されています。恵比寿神はイザナギ・イザナミ両神の子である蛭子命とも、大国主命の子である事代主命ともいわれます。最初は航海安全の神、のちに商売繁盛の神として信仰され、えびす顔といわれるように愛敬の福徳も授けます。

【参考】細田隆善『深川七福神』

第一ホテル両国・さくら

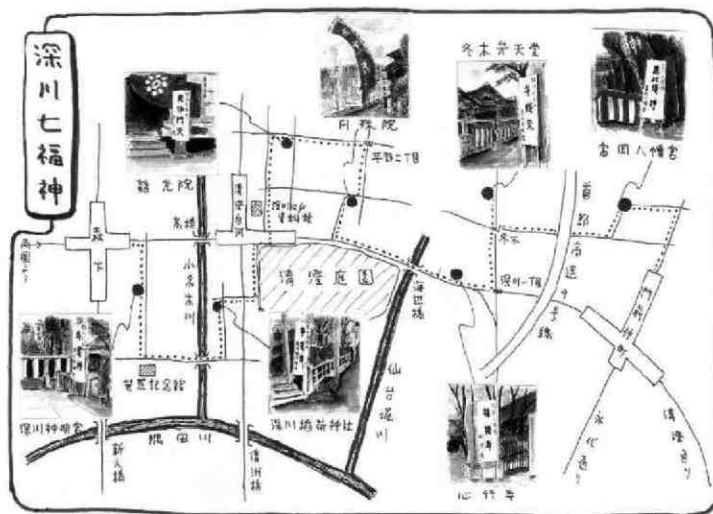
「さくら」は第一ホテル両国の25階にあり、見晴らしのよいのが特色です。夜は完全な和食の店ですが、昼はバイキング。和食があるのが売りで、手巻きずし、てんぷら、ちゃんこ鍋、茶碗蒸しなどがある一方、にしんのワイン漬け、サーモンのマリネ、かきフライ、スパゲッティなど、洋風ものもたくさんあります。デザートは、ケーキやアイスクリーム、メロンなど10種類。飲み物はお茶のほか、コーヒーと紅茶です。酒類は別途に注文します。品切れのものはすぐ補充され、しばらくするとできたがきています。手巻きずしは皿にすし飯や具を載せて席に持ち込み、巻きながら食べることをお勧めします。



バイキングといってもテーブル席になっているので、予約するのが確実です。ふりの場合は12時40分過ぎに。ランチタイムは11時半~14時。

料金 平日(土、日、祝日)
大人1995円(2205円)、
小学生1260円(1365円)、
生ビール(中)646円、日本酒1合600円ぐらいから。
4月頃までは開店5周年記念で、月曜は男性のみ10%引き、火曜は60歳以上10%引き、水曜は牛(または子豚か子羊)の焼きたてロースト、木曜は点心の追加サービスを行っている。
江戸博から徒歩4分 墨田区横綱1-6-1
電話03-5611-8469または8470

【取材】文：広報部会・大野晴美
写真・地図：同・松原良



催事案内

友の会セミナー

第36回 「シーボルトとモースの日本コレクション」 — 19世紀における日欧米異文化交流—その2 講師 小林淳一さん

◆江戸時代の鎖国下、わが国とヨーロッパの唯一の窓口であった長崎出島に、文政6年(1823)、オランダ商館付医官シーボルトが来日しました。医学をはじめ西洋の最新の科学技術をもたらす一方、日本の総合的研究のため膨大な日本文物をオランダに持ち帰りました。また、視覚的な記録を残すべく、長崎在住の町絵師・川原慶賀に大量の絵を描かせました。ライデン、ミュンヘン、ベルリン、ウィーン、サンクトペテルブルクなど、各都市の博物館に現在も保存されているシーボルト・コレクションに着目しつつ、シーボルトの歴史的業績を、前回(11月26日)に続き、紹介していただきます。

- 講師略歴：こばやし・じゅんいち
江戸東京博物館 事業企画課長(学芸員)。著書に『海を渡った生き人形—ベリー—以前以後の日米交流—』(朝日選書)、共著に『黄昏のトクガワ・ジャパ—シーボルト父子の見た日本—』(NHK ブックス)ほか。
- ・開催日：1月21日(土) 10:00～11:30
 - ・申込締切：1月12日(木)必着
 - ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
 - ・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
 - ・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)
- 【企画担当責任者】 米山彰(事業部会)

第38回 「寺子屋教育と現代」 講師 市川寛明さん

◆寺子屋という言葉はよく聞きますが、寺子屋でいったいどのような教育が行われていたのかについては、あまり知られてはいません。そこで寺子屋での学びの具体的な様相とそれを支えた学習観などを紹介し、あわせて近代化の過程でどの点が失われたのか、どの点が近代の学校教育制度へ継承されたのか、という点を考察していただきます。

- 講師略歴：いちかわ・ひろあき
江戸東京博物館学芸員。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了、社会学博士。編著に『一目でわかる江戸時代』(小学館)『江戸の学び』(河出書房新社)など。
- ・開催日：3月3日(金) 10:00～11:30
 - ・申込締切：2月21日(火)必着
 - ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
 - ・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
 - ・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)
- 【企画担当責任者】 米山彰(事業部会)

第37回 「日記にみる御家人子弟の勉強生活」 —井上範之丞の青年期を中心に— 講師 石山秀和さん

◆みなさんの中には本年度の第2企画展「井上廉と川村掃元—ある幕臣の幕末・明治—」をご覧になった方もおられるかもしれませんが、本館の収蔵資料にはいわゆる武家文書の井上家文書があります。2代目の範之丞が20代の頃に記した貴重な日記が数年分残されています。この資料を中心に、御家人子弟の勉強生活について話していただきます。

- 講師略歴：いしやま・ひでかず
江戸東京博物館 都市歴史研究室講師。立正大学大学院文学研究科博士課程修了。主要論文に「幕末維新期における江戸東京の手習熟と教育内容について」(『東京都江戸東京博物館研究報告』第9号)がある。
- ・開催日：2月25日(土) 10:00～11:30
 - ・申込締切：2月16日(木)必着
 - ・会場：江戸東京博物館・1階会議室
 - ・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
 - ・参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)
- 【企画担当責任者】 米山彰(事業部会)



特別内覧会

企画展 「江戸の学び—教育爆発の時代—」展

◆江戸時代、人びとの読み書き能力は非常に高かったといわれます。また、文字を使用した文化が大きく育まれたのも江戸時代の特徴といえるでしょう。寺子屋など子どもたちの学習風景はもとより、文字を楽しむ人々や勉強に励む武士など、江戸時代の教育の実態を、絵画や古文書など数多くの資料によってさまざまな角度から紹介する展覧会です。

- ・開催日：2月17日(金)午後(開始時間未定)
*開始時間は申込んだ方に受講票でお知らせします。
 - ・申込締切：2月7日(火)必着
 - ・会場：江戸東京博物館・1階ホール/企画展示室
 - ・定員：100名 同伴者可(はがきに氏名連記)
 - ・参加費：会員500円、同伴者700円(当日払い)
- 【企画担当責任者】 米山彰(事業部会)

古文書講座



第3期の日程など

- *入門編 1月11日(水)、2月8日(水)、3月1日(水)
- *初級編(1) 1月18日(水)、2月15日(水)、3月15日(水)
- *初級編(2) 1月21日(土)、2月18日(土)、3月18日(土)
- ・開催時間：すべて14:00～16:00
- ・会場：江戸博1階会議室または学習室1・2のどちらか(当日お確かめください)
- ・講師：野尻泰弘さん(品川歴史館)、小宮山敏和さん(学習院大学大学院史学専攻)、小松賢司さん(同)が交互に担当
- ・参加費：1講座1500円(初回当日払い・各講座とも)
【企画担当責任者】 谷岡文彦(専業部会)

お申込方法

- ◆普通はがきに、①催事名・開催日、②会員番号、③氏名(同伴者連記)を明記して下記の「友の会事務局」へ。
- ◆締切：各催事の案内をご覧ください。
- ◆申込は、各催事ごとに会員1人1通。
- ◆友の会へのご意見・ご要望もご記入ください。
- ◆申込先：〒130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1 江戸東京博物館友の会事務局

*お申込いただきますと、「受講票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付でご登録ください。
なお「受講票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
*「受講票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく水曜日から金曜日をお願いいたします。
*「受講票」がないと受講できません。必ず事前に申込をしてからご参加ください。



●第8回友の会セミナー「吉原はこんな所でした」で講師を務められた福田利子さんが昨年10月22日肺炎のため85歳で逝去されました。謹んでごめい福をお祈り申し上げます。

●第32回友の会セミナー「戦後60年“ホテル帰る”」で講師を務められた赤羽礼子さんが昨年10月16日腎臓がんのため75歳で逝去されました。謹んでごめい福をお祈り申し上げます。

江戸東京博物館友の会 会報<えど友>第29号
平成18年1月1日発行
奇数月刊。次号は平成18年3月1日発行予定

編集・制作：友の会広報部会
〒130-0015 東京都墨田区横綱1-4-1 電話 03-3626-9910
発行人兼編集長：松原 良(副会長) 副編集長：菅沼和男
編集人：岡橋園子、佐藤幸彦、小柳英二郎、大野晴美、
斎藤美香子、稻垣武志、岡田守弘、高澤美恵子、岡本静雄

会員優待のお知らせ

好評開催中!

●大河ドラマ

『功名が辻』特別展「山内一豊とその妻」

会期 2005年12月23日(金・祝)～

2006年2月5日(日)

休館日：毎週月曜日と年末年始(12月28日～1月1日)

ただし、1月2日(月)・9日(月・祝)・16日(月)

は開館、1月10日(火)は休館

*年始は2日から開館しますが、1月2日(月)・3日(火)は午前11時からの開館です。1月4日(水)から通常どおり午前9時30分開館となります。

図録 定価2,200円 会員2,000円(200円引き)

会員：一般600円、65歳以上300円、大・専門生480円

同伴者：一般960円、65歳以上480円、大・専門生760円

次回予告

●企画展『江戸の学び—教育爆発の時代—』展

会期 2006年2月18日(土)～3月26日(日)

休館日：毎週月曜日

図録 定価、会員割引ともに未定

会員：一般500円、65歳以上250円、大・専門生400円

同伴者：一般800円、65歳以上400円、大・専門生640円

第2企画展ご案内

1月2日より開催!

●「葛飾北斎—富嶽三十六景展」

●「福をよぶお正月展」

開催期間 2006年1月2日(月)～1月22日(日)

会場 5階常設展示室内 第2企画展示室

次回予告

●「東京エコ・シティ—新たなる水の都市」(仮)

開催期間 2006年1月27日(金)～3月5日(日)

会場 5階常設展示室内 第2企画展示室

